

戦国時代の会盟と国際社会

小林 伸 二

はじめに

戦国時代は郡県制や官僚制などの構築を通じた中央集権化のもと、領域拡張を目指す軍事と外交が展開され、王号称谓により戦国の七雄の対立抗争が顕在化した時期であった^①。そのなかで、諸国の国際関係を方向づける行為として会盟が実施され、秦の台頭にともなう合従連衡が進展した^②。ただ、戦争形態の変質と対立の恒常化のもと、会盟が当該期の軍事と外交でどのような役割と機能を果たし、そもそもその有効性はどうであったのであろうか。特に会盟を通じた覇者・主宰国の役割、強国間の動向、その傘下に組み込まれる諸国は如何なる関係を維持し、統一秦に向けた推移のなかでどう対処したかなど、会盟には多岐にわたる問題が存在するものと考えられる。

そこで、本小論では、当該時代における会盟と国際社会という視点から、強国の動向に留意しながら、軍事と外交の推移のなかで会盟という講和的環境がもたらす状況に着目し、あらためて統一秦に至る経緯の一端を概観するものである。なお、当該期の時代区分としてはかつて示した戦国前期を前四五三年から前三三四年の徐州の会盟まで、戦国中期を前三三三年から前二七九年の徐州相王後、斉の衰退を経た復興まで、戦国後期を前二七八年から前二二一年の

斉の復興後より秦による統合までとする理解に基づいている。⁽³⁾

一 戦国前期の会盟

前期の「会」「盟」などに関して確認するが、以下では「開催年 参加国（参加者）——会盟地——会盟種類（出典）」の順に列挙している。⁽⁴⁾

- 1 前四二一年 魯季孫氏・晋幽公——楚丘——会（紀年晋紀六四）
- 2 前四〇七年 齊宣公・鄭人——西城——会（田世家・六国表）
- 3 前三八九年 田太公・魏文侯・衛——濁沢——会（田世家・六国表）
- 4 前三六六年 魏惠王・韓懿侯——宅陽——会（魏世家・六国表・韓世家）
- 5 前三六二年 趙成侯・韓昭侯——上党——遇（趙世家）
- 6 前三六一年 魏梁惠成王・鄭釐侯（韓昭侯）——巫沙——会（紀年魏紀四三）
- 7 前三六一年 魏・趙——鄆——会（魏世家・六国表）
- 8 前三五八年 趙成侯・魏惠王——葛孽——遇（趙世家）
- 9 前三五七年 魏惠王・趙成侯——鄆——会（魏世家・六国表）
- 10 前三五七年 魏惠成王・鄭侯釐——巫沙——会（紀年魏紀五二）
- 11 前三五六年 趙成侯・齊威王・宋——平陸——会（田世家・六国表・趙世家）
- 12 前三五六年 趙・燕——阿——会（趙世家）

- 13 前三五六年 趙成侯・燕成侯―安邑〓会 (紀年魏紀五六)
- 14 前三五五年 魏惠王・秦孝公―杜平〓会 (魏世家・六国表・秦本紀)
- 15 前三五五年 齊・魏王―(臨淄) 郊〓会 (田世家・六国表)
- 16 前三五二年 魏・齊・宋―(圉) 襄陵〓会 (紀年魏紀七一)
- 17 前三五一年 魏・趙―漳水上〓盟 (魏世家・六国表・趙世家)
- 18 前三五〇年 魏・秦公―彤〓会 (魏世家・六国表)
- 19 前三四八年 趙肅侯・魏惠王―陰晋〓遇 (趙世家)
- 20 前三四四年 魏・諸侯―逢沢〓会 (周本紀・秦本紀・六国表・秦策四10)
- 21 前三四〇年 齊・趙―博望〓会 (魏世家・六国表)
- 22 前三三六年 齊(威王)・魏惠王―平阿南〓会 (魏世家・田世家・六国表)
- 23 前三三五年 齊王・魏―甄〓会 (魏世家・田世家・六国表)
- 24 前三三四年 齊威王・魏惠王―徐州〓会 (孟嘗君列伝・田世家・魏世家・六国表)

会盟として二四回確認できる。20前三四四年の魏・諸侯の逢沢での「会」に関して、秦本紀には「(孝公)二十年、諸侯畢賀、秦使公子少官率師会諸侯逢沢」と見えるが、秦策四10では「魏伐邯鄲、因退為逢沢之遇」と「遇」であり、「会」と「遇」の同質性が窺える。18前三五〇年の魏・秦の彤の「会」も六国表では「二十一、与秦遇彤」と、「遇」と記されている。したがって「遇」も会盟と同様の効力が期待された行為であったと考えるが、「会」が主流で「遇」はこの他、5前三六二年の上党、8前三五八年の葛孽、19前三四八年の陰晋のみである。なお、17前三五一年の魏と趙の漳水上での会盟は、魏世家に「(惠王)二十年、歸趙邯鄲、与盟漳水上」と見え、唯一の「盟」である。

会盟後の傾向を見ると、1前四二二年魯季孫氏・晋幽公の楚丘の「会」は、「取葭密、遂城之」（紀年晋紀六四）と、軍事行為に直結している。また、2前四〇七年、斉宣公・鄭人の西城の会では、対衛攻撃が確認できる（田世家）。14前三五五年、魏・秦の杜平の会も宋への侵攻へと展開した（魏世家）。これらは16前三五二年の魏・斉・宋の会が、「梁惠成王十八年、惠成王以韓師敗諸侯師於襄陵、斉侯使楚景舍来求成、公会斉、宋之圉」（紀年魏紀七二）と、攻圍のなかなされたように、会盟と軍事行動は密接な関係にあったと考えられる。こうして講和的環境をもたらす会盟には、軍事と連動する側面が見出せるわけである。

会盟自体は二国間同盟が主流で、三国間は3前三八九年、濁沢の会の斉・魏・衛、11前三五六年、平陸の会の趙・斉・宋、四国間は16前三五二年、襄陽の会の魏・斉・宋・衛、より多国間である可能性が窺えるものは20前三四四年、逢沢の会の魏・諸侯のみである。会盟の本質が二国間同盟であったことを示している。

会盟に関わる状況としては、20前三四四年、魏は逢沢の会で「朝天子」（秦本紀・六国表）と、講和後に天子に朝見した。覇者として諸侯を招集し、周王の認証を求めたものと考えられる。一方で、前三六〇年「九年、致文武胙於秦孝公」（周本紀）、前三四三年「十九年、天子致伯」（秦本紀）、前三三四年「天子致文武胙」（六国表）と、周王の秦を覇者と認定した対秦外交が認められる。⁶⁾さらに、前三三六年でも周本紀に「周顯王三十三年、賀秦惠王」と、周王朝による親秦外交が展開され、周王主導の秦を覇者とする国際社会構築の動きが窺える。こうして当該期、周の活発な外交が展開されたが、前三五〇年には、魏による「又從十二諸侯朝天子、以西謀秦」（斉策五一）と、十二諸侯を従え天子に朝し対秦対策を講じる、周王尊重の姿勢も見出させる。前三四六年に趙が天子（顯王）に朝見するが、これは前三四九年、趙が晋を実質的に滅ぼしたことが関係し（趙世家）、周室へ承認を求める趙の親周外交と考えられる。⁷⁾しかし、前述のとおり前三四四年に至って魏が逢沢の会で天子に朝すると（秦本紀）、翌前三三三年に周は秦へ「致伯」することから、魏の覇権を退け、秦を支持したものと考えられる。したがって、当該期の22前三三六年、23前三三五年、24前三三四年の魏・斉の会盟は、こうした周の構築する秦中心の国際社会に対する批判の意思表示であったとい

えよう。3前三八九年の田太公・魏文侯・衛の濁沢の会が、魏の斡旋により田斉に対し「周天子許之」（田世家）が主題であったように、会盟では盟主が周王の権威のもと、国際社会を牽引していた点が窺える。しかも、当該期の魏の参加・主宰の会盟が十五回確認できることから、国際社会での魏の存在は特別なものであったと考えられる。ただし、24前三三四年の斉威王・魏恵王の徐州での会が、「諸侯相王也」（田世家）と「相王」の確認で、実質的に魏・斉の周王否定だったことからすれば、魏は当該期、周王を凌駕する存在と自認していたと見るべきであろう。

会盟地に関しては、7前三六一年・9前三五七年の鄆が複数回地として確認でき、魏・趙の恒常的な外交の場であった可能性が窺える。

会盟の構成員では、4前三六六年、「魏恵王」「韓懿侯」の宅陽の会など、諸侯同士と明確に確認できものが見出せる。その他、15前三五五年の斉・魏の郊での会は、「与魏王会田於郊」（田世家）とあり、諸侯同士の会盟の可能性が高い。あるいは、20前三四四年の魏・諸侯の逢沢での会で、「朝為天子、天下皆從」（秦策四10）のように、会盟が周王中心の国際関係を前提することからすれば、諸侯自身の会盟出席が正式であったと考えられよう。いずれにしても、会盟が当該期の国際社会で重視されていた点が窺える。

会盟の参加国では、魏・秦・斉・趙・韓・燕が確認できるが、七雄の一国である楚は見られない。一方で、晋・魯・衛・宋の当該期前半の会盟への参加が認められる。

以上から当該期の会盟は「会」が主流で、軍事行動を前提に機能する二国間関係であった。こうしたなか、魏は前三六一年の趙との鄆の会、前三五五年の秦との杜平の会、斉との会、前三五〇年の秦との彤の会、前三四八年の趙肅侯との陰晋の遇と、会盟を通じてその存在感を国際社会に示していた。魏のこの覇者としての強国化が前三六六年に魯・衛・宋・韓による魏への朝を出現させたのであった（魏世家・六国表）。一方で前三六〇年、周では「致胙」（六国表）と親秦外交を推進し、魏は前三五〇年、十二諸侯を従えて天子に朝し対秦対策を画策（斉策五1）、秦と国際社会で周王の認証を争ったわけである。ただ、前三四八年、韓の対秦外交（韓世家）、前三四六年、趙による周への朝と（趙

世家）、国際社会では秦を覇者とする周―秦体制を容認する動きも認められた。したがって、前三四四年、魏が逢沢で会盟を行い周に朝したのは、国際社会で周―魏―諸侯というヒエラルヒーを明確にする意図をもった行動であったといえる。しかし、前三三三年に周は秦に「致伯」（秦本紀・周本紀・六国表）と、周―秦―諸侯という周王朝主導の方向性を目指したものと考えられる。翌前三三二年の諸侯による秦への「畢賀」（秦本紀）は、秦覇体制の確立と諸侯も周―秦を中心とした国際社会に取り込まれていたことを示しているよう。前三四〇年の斉・趙の博望での会後の魏攻撃は（魏世家）、こうした国際社会の動向の表れと見做される。ここに、前三三七年、楚・韓・趙・蜀らの秦への来朝（六国表）、前三三六年、周から秦恵王への「賀」（六国表）、前三三四年の周から秦への「致文武胙」（六国表）と、周―秦による国際社会の構築が進展した。一方で前三三四年、魏恵王・斉威王の徐州の会での王号の相互確認は、周王の封建理念自体の否定で、秦の覇権と周―秦による国際社会の構築を容認しない立場を鮮明に打ち出したものであった。当該期は会盟による講和にあつて、周王主導の覇者を通じた国際社会のもと外交関係が展開されていたのである。

二 戦国中期の会盟

中期の会盟を確認する。

- 1 前三三九年 魏恵王・秦恵文君―応Ⅱ会（秦本紀・六国表）
- 2 前三三五年 魏恵王・韓威侯（韓宣王）―巫沙Ⅱ会（紀年魏紀九五）
- 3 前三三四年 魏恵王・韓威侯・斉威王―平阿Ⅱ会（紀年魏紀九八・孟嘗君伝）

- 4 前三三三年 秦・楚・齊・魏(相)——齧桑〓会 盟 (楚世家・秦本紀・魏世家・田世家・六国表・張儀伝)
- 5 前三三二年 魏惠王・齊威王——鄆〓会 (紀年魏紀九九)
- 6 前三三二年 韓・趙——区鼠〓会 (趙世家・韓世家・六国表)
- 7 前三三三年 秦王・魏王——臨晉〓会 (六国表・魏世家・秦本紀)
- 8 前三二〇年 秦(武王)・魏(惠王)——臨晉〓会 (秦本紀・魏世家・六国表)
- 9 前三〇九年 楚・魏〓会 (紀年魏紀一九)
- 10 前三〇八年 秦武王・魏(惠王)——扈〓会 (魏世家・六国表)
- 11 前三〇八年 秦武王・韓襄王——臨晉〓会 (秦本紀・韓世家・六国表)
- 12 前三〇四年 秦昭襄王・楚懷王——黃棘〓会 (秦本紀・楚世家・六国表)
- 13 前三〇二年 魏王・秦王——臨晉〓会 (秦本紀・魏世家・六国表)
- 14 前三〇二年 韓太子嬰・秦王——臨晉〓会 (韓世家・六国表)
- 15 前三〇〇年 薛侯・魏王——釜丘〓会 (紀年魏紀一二九)
- 16 前二九九九年 楚懷王・秦昭王(將軍)——武關〓会 (楚世家)
- 17 前二九九九年 齊王・魏王——韓〓会 (韓世家・六国表)
- 18 前二八八年 齊・趙——阿〓遇 (縱橫家書四章)
- 19 前二八五年 秦・趙王——中陽〓会 (趙世家・秦本紀・六国表)
- 20 前二八五年 秦昭王・楚頃襄王——宛〓会 (秦本紀・楚世家・六国表)
- 21 前二八四年 秦王・魏王——宜陽〓会 (秦本紀)
- 22 前二八四年 秦王・韓王——新城〓会 (秦本紀)
- 23 前二八四年 秦王・魏——西周〓会 (六国表・魏世家)

24 前二八四年 秦昭王・韓——西周——会 (六国表・韓世家)

25 前二八三年 趙王・燕王——遇 (趙世家)

26 前二八三年 秦昭王・楚王——鄢——会 (秦本紀・楚世家)

27 前二八三年 秦王・楚王——穰——会 (秦本紀・楚世家・六国表)

28 前二八二年 秦王・韓王——新城——会 (両周間) (秦本紀・韓世家・六国表)

29 前二八二年 秦王・魏王——新明邑——会 (秦世家)

30 前二七九年 趙王・秦昭王——西河外——会 (趙世家・六国表)

会盟として三〇回見られ、会が主流であるが、18前二八八年の齊・趙の阿での「遇」(縦横家書四章)、25前二八五年の趙・燕でも「遇」(趙世家)が確認できる。ただ、30前二七九年の秦・趙両王の西河外での会は、趙世家に「(惠文王二十年)王与秦昭王遇西河外」とあるが、六国表では「与秦会緄池、藺相如従」と、「遇」と「会」の同質性が見出せる。また、4前三三三年の秦・楚・齊・魏の齧桑での会盟は、楚世家には「秦使張儀与楚・齊・魏相会、盟齧桑」とあり、「会」「盟」であった。12前三〇四年の秦昭襄王・楚懷王の黄棘での会盟も秦本紀に「三年、王冠、与楚王会黄棘」だが、楚世家では「二十五年、懷王入与秦昭王盟」と「盟」である。

会盟傾向としては、9前三〇九年の楚・魏の会は、紀年魏紀一一九に「(襄王)十年、楚庶章率師来会我、次于襄丘」とあり、軍隊を率いての会・次で、会盟と軍事行動の連続が認められる。24前二八四年の秦・韓の西周での会も対齊軍事行動のためのものであった(韓世家)。一方、18前二八八年の齊・趙の阿での遇では、縦横家書四章に「齊・趙遇於阿、王憂之、臣与於遇、約攻秦去帝」(齊・趙、阿に遇い、王、之を憂う、臣、遇に与かる、秦を攻め帝を去らんことを約す)とあり、齊は趙と阿で遇し秦攻伐を約して、帝号を廃したと伝える。「遇」が対秦軍事行動の「約」の前提であったわけである。また、25前二八三年の趙王・燕王の遇に関しては、趙が齊に絶大な力を保持する燕との

同盟後、廉頗を将として斉の昔陽を攻め占領している（趙世家）。趙にとつて燕との会盟は斉都陥落後の対斉軍事行動の承認を得るためであつたと考えられる。26・27の前二八三年、秦・楚の会盟では、秦は会後、魏に侵攻し安城を抜き、都の大梁にまで到達している（秦本紀）。やはり会盟が軍事行使の承認という性格を帯びていた点が窺える。さらに、前二八二年の28・29の秦と韓・魏の会盟は、趙が前年に秦の提案する対斉攻伐に不参加だったことを口実に、秦が趙の二城を攻撃したこと（趙世家・秦本紀・六国表・編年記「秦昭王」二十五年、攻茲氏）に係るようである。秦の行動には韓・魏の秦同盟入りが前提で、三国はそれぞれ会盟を行ったのが、対趙軍事行使の承認を前提としたものと考えられよう（秦本紀・韓世家・六国表）。こうして会盟は、前期の会盟が軍事行動に連続するのとは異なる側面を示している。

会盟自体は二国間同盟が主流であつた。前二八四年、秦が韓・魏・趙・燕と斉を攻伐するが、この前提としての同年21の秦・魏の宜陽での会、22の秦・韓の新城での会は、秦本紀に「王与魏王会宜陽、与韓王会新城」と、秦王が魏王・韓王とそれぞれ行つており、二国間会盟の尊重を示すものと考えられる。したがつて、23前二八四年の秦・魏の西周での会、同24秦・韓の西周での会も、同地における秦の二国間外交重視の姿勢を表すといえよう。多国間会盟としては、四国の4前三三三年の秦・楚・斉・魏の鬻桑での盟のみであつた。ただ、会盟自体は魏世家に「十二年、楚敗我襄陵、諸侯執政与秦相張儀会鬻桑」と見え、秦相の張儀が諸侯国の相・執政らと行つたものである。これは当該期に一時的な国際和平を出現させる、四大国の称王の実質的な相互確認であつたが（楚世家・燕世家・六国表）、他の諸侯国にも広がり、「是時六国皆称王」（魯世家）という状況を生んだ。周王中心の世界から、秦による新たな国際秩序を模索する動向の一つといえよう。なお、前期のような諸侯を招集し、覇者として周王の認証を求める会盟は見られない。あるいは、23前二八四年の秦・魏の西周での会、同24秦・韓の西周での会などは、地主として周が関わっていたのかもしれない。

会盟に関わる状況としては、当該期、秦の参加・主宰の会盟が二一回確認され、秦が国際的に有力であった点を伝えていいる。1 前三二九年の魏恵王と秦恵文君の応での会では、魏が秦に上洛の割譲を条件に楚との関係を断絶させたが（秦策四5）、秦が魏に侵攻することから（秦本紀・六国表）、効果は認められなかったようであった。前三二六年には趙肅侯の死去にともない、秦・楚・燕・斉・魏が会葬し、秦同盟再構築の様相を呈したが、翌前三二五年、斉・魏の趙攻伐（魏策二1、紀年魏紀九七）による反秦動向にあつて、秦・韓・魏は王号を称した（秦本紀・六国表）。こうして秦が自ら周王朝中心の理念を否定し、覇者としての立場を実質的に放棄したわけである。23 前三二三年の秦・楚・斉・魏の相らの齧桑の会盟も、新時代の到来にともなう秦体制下に出現した相参加の多国間外交と考えられる。加えて秦王自らの周王朝理念の否定が、秦・韓・魏・楚・斉の称王承認に繋がり、当該期の新たな国際社会の枠組みを形成した模様である。一方で、前三二五年、韓宣王の魏への朝（紀年魏紀九五）、2 の魏恵王・韓威侯（韓宣王）の巫沙での会（紀年魏紀九五）は、反秦体制に関わるものと考えられる。⁹⁾ 5 前三二三年、斉も魏と鄆で会を行い魏との関係を修復し、新たな外交を展開する。同年6 魏と行動をともにした韓も趙と区鼠で会し、秦から距離を置いた外交を模索していたようである。前三二二年、趙と韓が通婚（趙世家・六国表）、韓と魏が領土の一部を交換するなど（韓策二3・西周策12）、斉の目指す反秦傾向は加速していたが、このとき魏に周王朝を尊重する視点が見られ（西周策12）、依然として国際社会には周王の権威が存在したようである。また、前三一八年、東周から楚への「東周之客經胙于栽郢」（包山楚簡）は、周が秦ではなく楚の覇を認め、自らの権威の回復を目指した可能性が窺える。こうしたなか、前三一五年に周慎靓王が死亡、赧王が即位すると、周は東西分治の状況に至る（周本紀）。当該期、諸国に対する周王朝からの「賀」「致」などの対応が見られないのは、こうした周王朝をめぐる情勢が関係していたのかもしれない。前期と異なる特徴として留意すべきであろう。7 前三一三年、8 前三一〇年に至り、秦と魏の接近が認められるが、この間、前三一一年、楚世家に「十八年、秦使使約復与楚親、……、儀因説楚王以叛従約而与秦合親、約婚姻」とあり、秦は楚との関係改善を求め、張儀が楚王に説いて合従から離脱させ、婚姻を取り付けている。そして、

前三〇九年に秦では浙里疾・甘茂を左右の丞相とする新体制が誕生した（秦本紀・六国表）。9 楚が魏と会したのは、こうした情勢に対する警戒と見做される。10 前三〇八年に秦武王は魏恵王、11 韓襄王と会するが、秦の臣の話に秦が西周を攻めると天下の諸侯が憎むという言説あり（秦本紀）、秦の周攻伐の意思が窺える。一方で前三〇七年に秦が韓を攻撃すると（秦本紀・六国表・韓世家）、楚はこの事態に韓を救う動きを示し、周が秦と繋がっているとの認識から周攻伐を目指した（周本紀）。周・秦をめぐる情勢は流動的であつたと考えられる。前三〇〇年には秦・楚の軍事衝突で（秦本紀・編年記「新城陥」）、楚は斉へ太子横を質として講和を求め（楚世家・楚策二・四七）、15 斉では薛侯が魏王と会し、楚が楚太子を介して講和を孟嘗君に求めるなど（趙策四16）、斉を中・心に対秦対策が講じられた^⑩。前二九九年に至り秦では韓公子長（辰）と魏公子勁を諸侯とし（秦本紀）、韓・魏両国を取り込み、対斉・対楚関係に配慮したが、これは諸侯認定という周王の行為の実行に他ならない。いずれにせよ、秦の周王朝尊重の外交方針は転換されたものと考えられる。こうしたなかで、17 前二九九年に斉・魏・韓三国は同盟関係を再確認している（韓世家・六国表）。翌前二九八年には趙は秦と「結」、楚と「連」するが、これは仇郝を宋の相に、楼緩を秦の相とする人事に関わる会合であつた（趙策四16）。前二九六年に至り斉は魏・韓と秦に攻撃を加え（六国表）、他方で秦では前二九五年、翌前二九四年と魏を攻伐（魏世家・六国表）、前二九三年には韓・魏が東周を引き入れ秦を攻撃したが、秦軍の前に敗退する（魏世家・韓世家・六国表・秦本紀・楚世家）。秦の対魏攻撃は翌前二九二年にもなされ（秦本紀・編年記「秦昭王」十五年、攻魏）、前二九一年には秦は韓の宛を攻略（韓世家・六国表・編年記「秦昭王」十六年、攻宛）、さらに魏に攻撃を加えた（秦本紀）。秦は前二九五年にも、魏を攻撃（魏世家・六国表）、翌前二九四年に魏（魏世家）、そして韓を攻略する（秦本紀）。この事態に対し、前二九三年には韓・魏は東周を引き入れ秦を攻撃したが、秦軍に破られる（魏世家・韓世家・六国表・秦本紀・楚世家）。周は明確に反秦の姿勢を示し韓・魏に接近し、秦の軍事力の前に退けられたわけである。前二九一年には秦が韓を攻略すると（韓世家・六国表・編年記「秦昭王」十六年、攻宛）、翌前二九〇年、韓の城陽君、東周君が秦に朝し（秦本紀）、秦・韓・東周で対魏戦略の一体化がなされたよ

うである。前二八九年に至り秦はまた魏に軍事行動を加え（秦本記）、前二八八年には秦が自ら西帝、斉が東帝となったが（秦本紀・楚世家・田世家・魏世家・六国表）、18 斉は趙と阿で遇して、ともに秦攻伐を約し、帝号を廃した^①。こうして、当該期では斉などを中心に對秦関連の会盟も認められるが、秦の強大化は反秦の動きを一方で加速させていたと見做される。前二八七年の趙・楚・韓・魏・斉の「約」は、對秦軍事行動を前提とする（趙策四二）、同盟と考えられる。なお、前二八六年には燕が斉との關係を断ち秦と結び、秦西帝、燕北帝、趙中帝となって天下に号令すべきとの意見も見られるが（縱横家書二〇章・燕策二13・蘇秦伝）、ここでも秦を中心に周王朝体制は否定されていたのであった。秦は19前二八五年に趙と中陽で、20楚と宛で、21前二八四年には魏と宜陽で、22韓と新城で、それぞれ会盟を独自に行った。また、前二八四年の斉都陥落（六国表）に際し、秦は23魏・24韓とそれぞれ西周に会しているが、西周が会盟地であるのは秦が周を取り込んだことを示唆しているよう。しかし、周は王朝としての立場を依然として堅持していたようである。楚世家頃襄王十八年（前二八一年）条に、楚が斉・韓と連合して秦を攻撃しようとするが、同時に周への恩惑を保持しており、周王赧は西周の武公を楚に使者として遣わし、楚の計画を断念させた話を伝えている。それには「天下の状況」にあつて、「共同の元首・主君の存在」としての周王朝の位置づけによって、「大国・小国關係がうまくいく」と主張されている。さらに、「軍事的に周は晋の二〇倍」であると「周の軍事力」を誇示し、その領土を「両周の地は百里に過ぎない」としながら、周は「天下の共同の元首であり」、「君主・大臣も周の名義を借りないものはいない」とする。加えて、保有の「祭器の重要性」に基づく周王の尊嚴もと、その「天下の元首を殺害することは意味がない」と強調し、「周王の存在の重さ、大きさ」を周王赧は力説している。これらは、周王朝尊重の理念に基づく、あくまで周の立場からの主張であり、趨勢として周が秦の保護下にあったものと考えられる。ただし、当該期では周の帰属をめぐる秦・楚の流動的外交が展開されたように、周王朝の存在が国際關係を左右していたことは確かである。

会盟地の複数回利用として、臨晋は7前三一三年の秦・魏、8前三一〇年の秦・魏、11前三〇八年の秦・韓、13前

三〇二年の秦・魏、14前三〇二年の秦・韓の会盟地だが、秦にとつて魏・韓外交で重要な地であつたものと見做される。また、西周は秦の魏・韓（23・24）、新城は秦・韓（22・28）、応は秦・魏（1・10）の会盟地であり、秦の二国間外交における恒常的地点あつたのかもしれない。秦の会盟地重視の側面を示していよう。

会盟の構成員では1前三二九年の魏恵王・秦恵文君の応での会など、諸侯同士のものが圧倒的で、会盟が諸侯にとつて重視されていた点が窺える。ただ、そうしたなかで、諸侯に限定されない4前三三三年の鬻桑での会盟は、秦主導の相ら参加の多国間外交として注目される。また、9前三〇九年の楚と魏の会は軍隊を率いた楚大夫の会盟参加であつた（紀年魏紀一一九）。同年、秦では浙里疾・甘茂を左右の丞相とする新体制が誕生したが（秦本紀・六国表）、当該期での相の重要な立場が会盟参加をもたらしのかもしれない。なお、15前三〇〇年の薛侯すなわち孟嘗君と魏王の釜丘での会は、封君と諸侯によるもので、前期には見られない動向である。

会盟の参加国としては、前期に見えなかつた楚が確認され、いわゆる戦国の七雄に限定される。当該期が戦国の七雄の時代であつたことを反映する現象といえよう。

以上、戦国中期の会盟は軍事行使の承認・容認として機能し、前期の軍事行動への直結とは異なる面を示した。それは、前三二三年、鬻桑の盟で秦が自ら周王朝中心の理念を放棄して新たな国際関係を目指す一方、魏の周王朝を尊重の動きなど、依然として周王朝の権威を前提するものであつた。こうしたなか、周は楚を覇者として認め、権威の回復を試みるが、前三一五年に周慎靓王が死去し、赧王が即位すると周は東西分治となる。さらに、前三〇八年に秦の周攻伐の意思が見出せ、前三〇七年には楚は周が秦と繋がっているとの認識から周攻伐を画策するなど、秦・楚とも周王朝尊重の外交に転換が認められた。他方で前三〇六年、斉は楚を含めた韓・魏・燕・趙の合従によつて、周王朝を尊重する体制の構築を試み、前二九三年、周も本格的に反秦の姿勢を示し、韓・魏に接近し攻撃に出たが、秦の軍事力の前に敗退した。そして、前二九〇年、東周君（周室）の秦への朝により、周王朝体制は本質的に崩壊し、東周が秦へ服従することになった。前二八八年の秦「西帝」・斉「東帝」の動きは、まさに周王体制を否定し新たな世

界の構築を志向する、当該期の国際環境を象徴した出来事であったわけである。当該期、各国称王と周王朝理念の喪失のなか、会盟を中心とした外交関係は、流動的で秦などの強国の動向に左右される側面を持っていたが、覇者にとって周王朝の存在、その権威が依然として前提条件であった。周王朝を如何に処遇し、国際社会の理解を得られるかが、会盟がもたらす講和に向けた要件と認められよう。

三 戦国後期の会盟

後期の会盟は二回確認できる。

1 前二七八年 秦王・楚王―襄陵㉔会 (秦本紀)

2 前二四二年 趙・魏―魯柯㉔会・盟 (六国表)

1 前二七八年の秦昭襄王と楚頃襄王の襄陵での会は、秦本紀に「二十九年、大良造白起攻楚、取郢為南郡、楚王走、周君来、王与楚王会襄陵、白起為武安君」と、前提に楚王の亡命と「周君来」があり、西周君が楚王を支持していたのかもしれない。ただ、翌前二七七年、秦の楚攻撃が認められることから(楚世家・六国表・秦本紀)、会盟は不調であったと考えられる。秦としては楚の背後にある斉を意識したことは確かである(斉策六10)。いずれにせよ、周は斉の臨淄陥落、秦と趙の対立、燕・楚と秦の対立のなか、楚側に与していたようである。2 前二四二年の趙・魏の魯柯での会・盟は、秦・趙関係が好転するなか、対秦対策を課題したものと考えられる。翌前二四一年に楚考烈王が合従の盟主となり、趙・魏・楚・燕・韓の連合軍が秦を攻撃するが(秦始皇本紀・趙世家・春申君伝)、この度の会盟は秦・

趙関係の破綻に関わっていたといえよう。いずれにせよ、当該期の二事例は秦の存在を前提とした会盟であった。

会盟に関わる状況としては、魏・秦では前二七五年の「入三県請和」(秦本紀)、前二七三年の「魏入南陽以和」(秦本紀)と土地の譲渡が、前二七二年には楚と秦の「入太子為質於秦」(楚世家)と質が、講和を出現させた。前二六六年には秦の魏攻撃に伴い(秦本紀)、秦・魏が講和し(秦策三九)、前二六五年に秦が韓を攻伐(編年記「秦昭王」四十二年、攻少曲)、秦は韓を同盟に組み入れた模様である。さらに、秦は趙の三城を抜き(趙世家・六国表)、前二六三年にも韓を攻撃(編年記「秦昭王」四十四年、攻大行、□攻・六国表・韓世家・秦本紀・白起伝)、魏ではこうしたなか楚・趙との講和を選択したが(魏世家・魏策三八・縦横家書一六章)、一方で翌前二六二年に楚は夏州を秦に納め和親を成立させた(楚世家)。同年にも秦は韓を攻撃し(編年記「秦昭王」四十五年、攻大野王・白起伝)(秦本紀)、前二六一年には趙の廉頗が長平で秦軍に対峙(六国表)、翌前二六〇年、秦が韓の上党に攻撃を加えた(秦本紀)。長平の戦いによって従来の同盟関係は崩壊し、斉をはじめ燕・魏が秦・趙のどちらと与するかが注目されたようであった。前二五九年、趙が秦へ入朝したが(趙策三一二)、交渉は不調におわり、前二五八年にも秦の邯鄲攻撃が見られる(秦本紀¹²)。前二五七年に至り秦の邯鄲攻囲にあつて、趙では平原君を楚に派遣して援軍を求め合従を成立させ(平原君伝、魏の公子無忌もこれに参加、楚・魏が連合して趙を救援すると邯鄲の攻囲は解かれた(趙世家・六国表)。合従した趙・魏・楚の軍の夾撃下に秦軍は大敗したが(范雎伝)、魏軍に対して反撃を加えた(秦本紀)。前二五六年には魏・楚に加え韓が合従に参加し、三国が趙の新中を救うと秦軍は一旦引き上げるが(六国表)、一転して韓・趙を攻めた(秦本紀)。こうして秦に対抗し韓・魏・楚・趙が同盟するなか、西周君が諸侯と「約従」して秦を攻撃、「於是秦使將軍繆攻西周、西周君走來自歸、頓首受罪、尽献其邑三十六城、口三万、秦王受献、歸其君於周」(秦本紀)と、周は危機的状況に陥ったが、秦がその存続を認めた(秦本紀)。秦には周王朝を尊重し維持する意思があったものと見做される。しかしながら、この西周の実質的傾国は、いわば覇者を超越して王朝存立の施策を講じた、秦主導の世界構築に向けた明確な意思表示であり、当該期の分岐点といえる事態であった。ここに秦本紀に「五十三

年、天下來賓、魏後、秦使摎伐魏、取吳城、韓王入朝、魏委國聽令」とある、前二五四年の天下の秦への來賓、韓の入朝、魏の服属を出現させ、前年の「五十二年、周民東亡、其器九鼎入秦、周初亡」（秦本紀）という周の変質を受け、前二五三年には「五十四年、王郊見上帝於雍」（秦本紀）と、上帝への祭祀を通じて天子としての秦の意思表示、すなわち周王朝の否定へと展開した。また、前二五一年には昭襄王の死去にともない諸侯による対秦弔問がなされ（秦本紀）、秦の周王朝を継承する立場、それを承認する国際社会が成立したと見做されよう。一方で対秦対策を課題した2前二四二年の趙・魏の魯柯での会盟、翌前二四一年の楚・趙・魏・燕・韓の「合従」と、楚を従長とした対秦戦争（春申君伝）、前二三三年にも秦・趙の対立が見られ（始皇本紀）、依然として反秦の傾向は認められる。しかし、前二三七年の齊・趙の秦への「入朝」「置酒」（秦始皇本紀・田世家・六国表）、燕の「賀」（燕策三4）は、秦の周王朝継承を承認する諸侯の動向として注目されよう。¹⁴

以上、後期では会盟は二回と激減し、ともに秦の存在を前提としたものであった。前二七八年、秦・楚の対立のなか親楚の立場で周では秦・楚会盟に関与したが、両国の対立、楚の背後にある齊の存在から、会盟は機能しなかった。また、周は齊の臨淄陥落、燕・楚と秦の対立のなか楚側に与したが、いずれも秦を意識した政策と見做される。他方、国際社会でも秦を念頭に多様な講和的環境が成立していた。前二七五年には秦・魏、前二七二年に楚・秦が講和した。さらに、前二六六年には魏と秦が講和するが、前二六三年、魏・楚・趙の講和をへて、前二六〇年に秦と趙の長平の戦いとなり、秦の勝利のなか前二五九年、趙・秦の講和が生まれた。しかし、前二五七年、趙と楚が合従し反秦の動きを見せ、前二五六年には西周君が諸侯と「約従」して秦を攻撃した。西周は危機的状況に陥ったが、この時点では秦に周王朝を尊重、維持する意思が存在していた。ただ西周の傾国には、覇者を超越した秦の世界構築に向けた意思表示が見出せ、当該期における重要な分岐点といえる。前二五三年の秦による上帝への祭祀は、天子としての秦王すなわち周王朝を否定した行為に他ならない。前二三七年の齊・趙・燕の秦への「朝」など、秦中心の国際社会が構築されたわけである。こうして当該期は、強国化した秦をめぐり、会盟ではなく本質的な二国間外交の成果が緊急に求

められていた。

おわりに

以上、戦国時代の会盟をめぐる国際社会の動向を概観した。

前期では会盟は軍事行動の前提としての機能を有し、前三四四年、魏が会盟を行い周に朝して、周―魏―諸侯という世界観を出現させた。それは、強国による当該期の講和が実現せず、周王の存在が尊重された点を示していた。その後、魏主宰の逢沢の会を経て、翌前三四三年に周が秦に「致伯」の通り、秦は周の信任を得た。しかし、一方で前三三五年、斉・魏の甄の会で斉らの周―秦体制否定の方向性が窺え、前三三四年、徐州の会の王号の相互確認も実質的な周王の否定であった。こうした周の親秦外交に対する斉らの抵抗と、魏・秦・斉の周王朝に対する思惑のなか、依然として国際社会は流動的な環境を見せていた。当該期は会盟等による講和にあつて、周王朝主導の覇者を通じた国際社会のもと外交関係が展開されていたのである。周王朝の権威に関する尊重と否定は、魏から斉・秦の東西対峙の勢力均衡に他ならない。

中期では会盟が軍事行使の承認・容認の側面を有し、前期の会盟の軍事行動への直結とは異なる面を示した。前三三三年鬻桑の盟で秦は自ら周王朝の理念を放棄し、新たな国際関係を目指すが、一方で魏が周王朝を尊重するなど、依然として周王朝を前提とする方向性が認められた。前三二八年に至り周は東周により楚を利用し、権威の回復を試みたが、前三一五年の周慎靓王の死去、赧王の即位後、東西分治となった。さらに、前三〇七年、楚では周攻伐を画策するなど、秦・楚とも周王朝尊重の外交方針に転換がなされた。前三〇六年に斉は合従による周王朝を尊重する体制の構築を試み、前二九三年には周も本格的に反秦の姿勢を示し韓・魏に接近、しかし秦の軍事力の前に敗退した。

こうして、周王朝体制は本質的に崩壊し、前二九〇年には東周が秦へ服従し、一時的に前二八八年、秦「西帝」・斉「東帝」により、周王朝を否定し新たな世界の構築が志向された。周王朝理念の喪失のなか、秦と各国の抗争により同盟関係はあらたな段階を迎えた。ただ、斉・秦の帝号称謂とその自らの否定は、覇者にとって周王朝の存在、その権威が依然として国際社会の前提条件であったことを示す。

後期では会盟は二回と激減するが、ともに秦を前提としたものであった。前二七八年に秦・楚の対立のなか周では親楚の立場で、秦・楚会盟に関与したが、会盟は不調に終わった。周は斉の邯鄲陥落、秦と趙、燕・楚と秦の対立する国際環境のなか、秦を意識した政策を講じた。一方、国際社会では前二七五年の秦・魏、前二七二年の楚・秦、さらに前二六六年の魏・秦、前二六三年の魏・楚・趙の講和をへて、前二六〇年に秦と趙の長平の戦いとなった。前二五七年に至り、趙と楚が合従し反秦に動き、前二五六年には西周君が諸侯と「約従」して秦を攻撃するが、西周は傾国に陥った。秦はこの状況下でその存続を認め、周王朝を尊重する意思を示した。しかし、西周の傾国は、秦の上帝への祭祀など、周王朝を否定する行動を通じて、覇者を超越した秦の国際社会での優位を招いた。

このように当該時代の会盟をめぐる動向は、魏・楚・斉・趙・秦の強国の関係によって推移したが、周王朝の権威を意識する傾向とも連動していた。なかでも、前三一五年に周慎靓王が死去し、赧王即位にともなう周の東西分治は当該時代の重要な転機であった。さらに、前二五六年の西周の危機的状況、翌前二五五年の周の宝器と九鼎の秦への搬入と、その傾国は、周王朝に対する国際社会の意識は変質させた。前二四一年に比定される『呂氏春秋』謹聽篇の「今周室既滅、而天子已絶、乱莫大於無天子、無天子則強者勝弱、衆者暴寡、以兵相残、不得休息、今之世当之矣」は、周王朝の衰退を受けた天子不在の状況を前提にした見解と考えられる。当該時代における周王朝は、諸国の会盟・覇者にあつて尊重されるべき紐帯であり、魏・秦の抗争と斉・楚などの動向のなか、強国に苦慮しながら国際社会に対処していたのであった。戦国時代の会盟は、秦に収斂される権力の推移にあつて、二国間外交を前提としながら、一方周王朝の国際社会での尊厳を尊重、維持する意識を共有していたと見るべきであろう。

- (1) 貝塚茂樹・伊藤道治『中国の歴史1』（講談社、一九七四年）、楊寛『戦国史（増訂本）』（上海人民出版社、一九八〇年）、平勢隆郎『中国の歴史02（都市国家から中華へ）』（講談社、二〇〇五年）等参照。
- (2) 会盟に関しては、工藤元男「戦国の会盟と符―馬王堆漢墓帛書『戦国縦横家書』二〇章をめぐる―」（『東洋史研究』53―1、一九九四年）、吉本道雅『中国先秦史の研究』（京都大学学術出版会、二〇〇五年）参照。
- (3) 拙稿「田斉の軍事と外交（一）」（『鴨台史学』10、二〇〇九年）参照。なお、本理解は、藤田勝久「戦国略年表」（佐藤武敏監修『馬王堆帛書・戦国縦横家書』所収、朋友書店、一九九三年）を参考にした上でのものである。
- (4) 会盟事例は、註(2)工藤氏前掲論文を参照し、一々註記しないが私見を加えたところがある。戦国紀年に關しては、楊寛『戦国史料編年輯証』（上海人民出版社、二〇〇一年）に準拠している。なお、以下、引用の史料は『史記』本紀、世家等は名称のみを示し、『戦国策』に關しては、諸祖耿『戦国策集注匯考』（鳳凰出版社、二〇〇八年）を参照し、常石茂訳『戦国策』1・2・3（東洋文庫、平凡社、一九六六―一九六七年）の各篇の分断に従っている。『竹書紀年』（紀年）は、方詩銘・王修齡『古本竹書紀年輯証』（上海古籍出版社、一九八一年）により魏紀六一などと記す。『戦国縦横家書』に關しては、『戦国縦横家書』（文物出版社、一九七六年）、註(3)佐藤武敏監修『馬王堆帛書・戦国縦横家書』参照。以下の釈読は後者によっている。雲夢秦簡『編年記』、包山楚墓出土竹簡（包山楚簡）は『戦国史料編年輯証』にもとづく。当該期の地名比定は、譚其驤主編『中国歴史地図集』第一冊（地図出版社、一九八二年）、朱本軍『戦国諸侯疆域形勢図考繪』（北京大学出版社、二〇一九年）参照。
- (5) 逢沢の会については、晁福林『逢沢之会考』（『文史』二〇〇〇―一）参照。なお、当該期の周王朝に關しては、晁福林『春秋戦国的社会変遷』上册（商務印書館、二〇一一年）参照。
- (6) 文武胙については、豊田久「周天子と文・武の胙の賜与について―成周王朝とその儀礼その意味―」（『史観』127、一九九二年）参照。なお、註(5)晁福林氏前掲書では、当該期、周王朝が依然として「天下共主」であった点

を強調する。

(7) 註(3) 拙稿参照。

(8) 称王については、註(1)楊寛氏前掲書参照。註(2)古本道雅氏前掲書にも称王に関わる議論が見える。

(9) 拙稿「田斉の軍事と外交―戦国中期―」(『川勝守・賢亮博士古稀記念 東方学論集』所収、汲古書院、二〇一三年) 参照。

(10) 拙稿「孟嘗君―戦国封君の一形態―」(『鴨台史学』14、二〇一六年) 参照。

(11) 秦・斉の称帝に関しては、註(2)工藤元男氏前掲論文参照。

(12) 趙策三13には秦の称帝問題の関する議論が見えるが(拙稿「田斉の軍事と外交―戦国後期―」(『大正大学研究紀要』99、二〇一四年) 参照)、工藤元男「皇帝号出現の背景―戦国時代の称帝問題をめぐって―」(『東方学会創立五十周年記念東方学論集』所収、一九九七年) は、これを長平の戦い後の前二五八年に比定し、秦では帝号の採用が決定され、統一帝国にむけての諸政策が準備されたと見做している。大櫛敦弘「統一前夜―戦国後期の「国家」秩序―」(『名古屋大学東洋史研究報告』19、一九九五年) は、「帝」である秦とそれに服属する他国による「国際」秩序を想定する。

(13) 東周は前二四九年に秦より誅されるが、「秦不絶其祀」(秦本紀) という措置が講じられ、その存続が認められている。註(5)晁福林氏前掲書参照。

(14) 註(12)大櫛敦弘前掲論文では、「入朝」に関して明確な服属関係を示す重い意味があるとする。さらに、戦国後期には秦が一段優位に立つて他の諸国がそれに服属する、秦を中心とする「国際」秩序が存在したと見做す。